Title	「物質化」再考：バトラーによるブルデュ批判の先へ
Sub Title	Rethink Materialization : Beyond Butler's Criticism on Bourdieu
Author	長野, 慎一(Nagano, Shinichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.97- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「物質化」再考

——バトラーによるブルデュ批判の先へ——

Rethink Materialization: Beyond Butler's Criticism on Bourdieu

長野 慎一

1. 研究の背景と目的

J. バトラーの「物質化」概念は、言葉の作用の結果、身体それ自体とこれを観念し表現する主体が、それ自体の権利で常に同一である、との地位を取得していく過程を指すものである（長野 2011）。本稿は、この解釈を継承しつつ、さらに2つの点から「物質化」を再考する。1つは、バトラーが前提する記号の範囲は狭すぎるという点について。もう1つは、〈ブルデュは発話行為の攪乱的性質を看過する〉とのバトラーの批判と〈身体と物¹⁾からなる社会〉というブルデュの論点との関係が、不明瞭である点に関して。

まず、記号表現としての〈身体 - 物〉を論じる必要性を示す（2章）。次にバトラーによるハビトゥス概念批判の意義を検証する（3章）。最後に、その限界と課題を提示する（4章）。なお、〈 〉は強調、表現の区切りの明示に、使用する。

2. パフォーマティヴィティ概念の拡張

（1）物質化とパフォーマティヴィティ

『問題＝物質となる身体』（Butler 1993）で提示される「物質化」という概念は、J. L. オースティンのパフォーマティヴィティ概念²⁾（Austin [1962] 1975=1978）の再解釈に基づく。

身体をめぐる言説のもとで生み出される、中立的な記述に過ぎないと称される発話（コンスタティブな発話）は、その中立性の主張ゆえに、権力関係とは無縁の産物であるかのごとく受容されるが、実は既存の権力関係の再生産を促すべく、中立的な言葉としての地位を付与されているのである。むしろ、その種の発話は、既存の権力関係を再生産するべく、身体取り扱いに関する規範を取り決め、あるいは、追認するための発話であり、この点ゆえに、パフォーマティブな発話である（Butler 1993 : ch1, esp. 35）。

「物質化 materialization」とは、かかるパフォーマティヴィティの結果として語る主体と物質としての身体が自己同一的なものとして社会的に作りあげられていく過程である。長野はそれを次のように整理する。①発話が、指示対象としての物質を名指す場合に、その発話が確立された言説の適切な引用であるがゆえに、物質について正しい観念を表す正しい言語使用としての適切性を獲得する。②その効果として、(a) 引用者には、語る主体としての正統な地位が付与され、(b) 物質は、真理を語る言葉に対応する自己同一的な指示対象の資格で存在するもの

として承認される。③物質化の相関物として現れる物質の様相を表現するのに、実体としての物質と区別し、自己同一的な存在者として実体化される物質を表す場合に、「物質性 materiality」(Butler 1993 : 34-5) という用語が使用される (長野 2011 : 32-4)。

だが、かかるパフォーマティヴィティを担う媒体は、言葉のみではない。例えば、異性愛主義的なセックス二元論に忠実な形で己の身体がいかようなものなのかを、自他に対して示すための記号表現には、儀礼化された身体の処し方、身にまとう物、身が置かれている空間を構成する物のあり方も含まれる。手振り・身振り、身体が関係を結ぶ物なども、記号表現として、ある項と別の項の差異を示し各々の項の価値を表示し、かつ対象世界を志向する指示作用をもちうるのだ³⁾。パフォーマティヴィティという用語でこそ語られないが⁴⁾、ブルデュは、その実践論において、〈記号表現〉としての〈身体 - 物〉について論じている。

(2) 身体と物のパフォーマティヴィティ

ブルデュがいう「実践」は、身体訓練を通じての文化的習得の結果として産出される歴史特殊的な心身構造をもとに、やはり歴史特殊な社会構造を再生産していく、身体的活動を伴う慣習的行動である (Bourdieu 1980=1988/90)。

実践の理論において、身体は、物質としての自己同一性を付与される対象としてのみ概念化されているのではない。身体は、自己同一的なものの領域を表現する媒体でもある。身体を取り囲む物も、身体と連動し、その身体が何者であるのかを指示する機能を担う。

例えば、部族社会の分析では、儀礼化された身体所作、身の回りの品や労働の用具、家、仕事場、社交などの活動ごとに区分された空間が、「男」と「女」の間では異なる様子が分析されている。男の身体、女の身体の同一性は、「男性的作法」「女性的作法」「男の空間」「女の空間」(Bourdieu 1980=1988 : 113, 123) の間の差異により示される。身体所作や物の配置に読み込まれる差異は、社会的価値の反映であるにもかかわらず、自然の秩序であるかのごとく人々に受容される (Bourdieu 1980=1988 : 113-5)。

実践の理論からは、次の命題が抽出可能である。いかに身体を制御するか、身体がいかなる物といかに関係を結ぶかということ自体が、記号として意味を形成し、それによって、「物質として、他の何らかの項目の相関項としてではなく、それ自体の権利において、同一であること」という意味での「物質的同一性」(長野 2011 : 46) を、実践に従事する者に、確認せしめる。それらも、身体それ自体という地位を産み出すパフォーマティヴィティなのである。

(3) パフォーマティヴィティと社会的位置

パフォーマティヴィティとは、身体についての語りに正統性を与える制度化された位置 (以下「社会的位置」) を形成する過程でもある。

バトラーは、〈パフォーマティヴィティの結果〉としてこそ、〈発話の正統性を担保する社会的位置〉は再生産されると強調する (Butler 1999)。他方、ブルデュは、社会的位置⁵⁾こそが、

パフォーマンスティヴィティの正統性を担保すると強調する。ブルデュがいうに「行為遂行的言語活動の呪術的效果の原理」は、「一部の人々が信じるように言語活動それ自体の中にあるのではなくて、この原理を権威づけそれによって権威づけられる集団、その原理を承認しそれによって承認される集団の中にある」(Bourdieu 1980=1988 : 183)。両者の主張を総合すれば、パフォーマンスティヴィティと社会的位置は相互に再生産しあう循環的な関係にあると論じられる。ただし、事はそう単純ではない。さらに、いかに両者の循環的關係が綻び、新しい社会的関係・物質的關係・象徴的關係が創造されるのかという問題が究明される必要がある。

ここで想起すべきは、言語一元論とのレッテル張りに抗弁する文脈でバトラーが依拠する J. デリダのいう「反覆可能性」である。それは、発話行為に関する分析で論じられる概念である。デリダは、「発話」の成否の条件として、「発話」が、己とは直に関係をもたない、「反覆」される「記号」の「引用」の中で、「同定可能」であること、をあげる。「パロールという諸効果」「意識という諸効果」の「相対的特有性」、「現前ならびに言説的出来事」は、「反覆可能性に抗してもちあがってくるのではなく、「一般的な反覆可能性の内部に位置する他の様々な反覆に抗して」「もちあがってくる」(Derrida 1990=2002 : 44-6 [強調点は引用者])。これを一般化していえば、「反覆可能性」とは、原理的に、①〈同一者〉(発話の内容、発話の主体の意識、発話という出来事など)が、〈同一者〉として同定されるために、〈同一者〉自身を指し示す(記号の引用の反覆)に依存しており、それゆえ、同一者は己自身の権利で同一性を主張することが不可能であり、その同一性は相対的自律性を特性としていること、②しかも、(a) その反覆は、他の競合する反覆可能性に抗して一定の構造を持続させているに過ぎない点で、偶発性を免れないのであり、(b) ゆえに、予期せぬ引用の発生を許容し、〈同一者〉から〈同一者たる地位〉を剥奪する可能性を宿していること、この2点を意味している。バトラーは〈引用としてのパフォーマンスティヴィティ〉の結果として、物質としての身体/話す主体が、同一者としての相対的自律性を得ると論じる。ならば、発話に正統性を付与するはずの社会的位置がその保証機関たる役割を担いうる条件は、その位置の正統性自体を毀損してしまうパフォーマンスティヴィティを排除することにある。その限りで〈パフォーマンスティヴィティに先立つ社会的位置の外在性)は真実としての外観を得る。この観点からは、以下の2つの命題が導き出せる。

①〈発話の成否を握る社会的位置が、発話自体に先立つものであるという措定行為〉によって、〈社会的位置に付属するはずのそれ自体の権利における正統性が構築される〉と論じることは、パフォーマンスティヴィティに対する社会的位置の外在性を否定するのではなく、〈社会的位置の外在性とは、正統的な引用に支えられることを通じて維持される相対的自律性である〉と論じることなのである。② (a) 正統的引用に対して異端的引用が勢力を増すとき、社会的位置が得ている相対的自律性は損なわれうる。(b) 結果、新奇の社会的位置、その位置の連合としての新しい社会領域が成立する可能性を生じさせる。バトラーの理論はパフォーマンスティヴィティの一般的構造において偶発的に成立している社会的位置の自律性⁶⁾に焦点をあて、さらに、異端的パフォーマンスティヴィティが正統的位置の変質と新奇の位置の創出に結び付く可能性に焦点

を当てる。

ブルデュの理論では、社会構造の変容可能性を論じられない、と断ずることは許されないであろう⁷⁾。しかし、ブルデュにおいては、〈同一的なもの〉が〈己の相関的他者〉との関係で変容する様態は理論化されていない。そこで、以下、他者に関するバトラーの理論をもとに、ハビトゥス／社会的位置といった概念の再構成を図る。ただし、同時に、身体をめぐる理論に限定しても、バトラーのそれは、ブルデュのハビトゥス概念が内包する〈知覚する身体〉という視点によって批判的に補完される必要がある。また、〈物質化〉概念についても、〈身体がその内に位置づく物の世界〉に関連付けて刷新される必要がある。そこで、本稿では、バトラーとブルデュの所論の相互批判的可能性を探究することをもって、物質化を主題とする社会理論の精緻化を図る。

3. ハビトゥスから排除される他者性

(1) 規範を再生産する機構としての実践感覚

ブルデュによれば、ハビトゥス(あるいは実践感覚⁸⁾)とは、「構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造」である(Bourdieu 1980=1988:83)。むしろ、「構造化された」というのは、客観的な「社会的世界のもつ必然性」(Bourdieu 1980=1988:82)に適合するべく構成されているという意味である。ハビトゥス概念が身体論との関係で重要である点は、「実践と表象の産出・組成の原理」が、身体の処し方の中でこそ賦活されると言うところにある。ブルデュは「感覚」として出現するこの「原理」を次のように述べる。

身体表象も世界表象も全く想定せず、ましてや身体-世界関係の表象も想定しない準身体的な世界志向、何をなすべきか、何を言うべきかが直ちに身振りや言葉を命ずるが、この緊迫性が世界から押し迫る世界への内在、このようなものが実践感覚であり、それらが諸々の「選択」を方向づける(Bourdieu 1980=1988:105)

「知はそれを運ぶ身体から決して分離されず、特別に知を呼び起こす一種の身体訓練による以外には再構成されない」(Bourdieu 1980=1988:118)。知覚の最終的審級を、ブルデュは、「社会的必然性」が「身体訓練」を介して仕込まれる過程で誕生する、「身体の状態」と化した「感覚」に見出す。いわゆる「実践感覚」である(Bourdieu 1980=1990:91, 109-10, 119)。

さて、バトラーもブルデュのハビトゥス概念をパラフレーズした上で、パフォーマンス・ティヴィ概念との関係について次のように言う。

ハビトゥスとは、既存の文化がそれ自身の『明証性』への信頼を生産し、保持することでなされる、日常性の身体化された儀式 embodied rituals である。……身体のハビトゥスは、

行為遂行性の暗黙の形態となり、身体レベルで生きられ信じられている引用の連鎖となるのである。(Butler 1997b=2004 : 236-40)

パフォーマティヴィティとハビトゥスの間に対応関係があるのは当然である。しかし、バトラーのパフォーマティヴィティ論からさらに付加しうる論点があるとすれば、引用の連鎖の一般的構造の中においてハビトゥスの形態へと帰着しえていない類の異端のパフォーマティヴィティが、いかにハビトゥスに変容をもたらすかであろう。『触発する言葉』の4章は、ハビトゥスが、排除された言葉、身体、物の引用の可能性からいかに逆襲されるのかを論ずるものである。だが、錯綜を極めているため、〈同一的なもの〉の〈己の相関的他者〉による変容が明確に示されているバトラーのメランコリー論をもとに、この主題を整理しよう。

(2) 他者のメランコリックな体内化とハビトゥス

バトラーはG. フロイトのメランコリー概念に着目し、規範の禁止に従うことで、断念される欲望の対象が、自我の構成の一要素として主体内に保存されると論じる。メランコリーは「対象が何らかの方法で『身体のかなか』に保持される、否定され宙づりにされた悲哀の状態」である。ただし、関係を結びたいと欲する対象が喪失されてしまっているという事態は究極的に名づけえない(Butler 1990=1999 : 130)。この状態においては、嫌悪の対象としての他者は、主体が〈自己同一性を構築する相手としては拒絶されながらも、なお自己を否定的に拮据する対照すべき相手〉として、主体の一部を構成している。例えば、同性愛の欲望は、断念の後、転じて、同性愛嫌悪という形態で、異性愛者の自我の一貫性を支える感情となるが、異性愛者は、同性に向かう欲望を否定し続けるという形で、己の感情が同性への欲望へと向ってしまうかもしれないという可能性にとりつかれることになる。異性愛者としての自我への固執は、語ることの許されない同性の対象に向かいうる愛の喪失に基づく(Butler 1990=1999 : 136)。

バトラーのいう「体内化 incorporation」は、〈幻想上の身体表象を基盤にもつ自我〉が、メランコリーの機制に沿って、生成していくことを指している。メランコリーの機制に従うがゆえ、体内化においては、主体は、己が感情的に結合しながらもそれを知ることが不可能な他者との関係を断ち切れないうまに、自らが依るべき自我を形成しなければならない(Butler 1990=1999 : 132-3)。他方、ブルデュがいう「体内化／身体化 incorporation」(Bourdieu 1980 : 94, 96=1988 : 89, 91)⁹⁾は、〈身体を用いた模倣を通じて、知覚システムとしての身体が、社会的に作られる過程〉を指すことに特化されており、メランコリーの機制が知覚の被構築に関与するあり方は等閑視されている(本稿では、ブルデュがいう“incorporation”を意味する場合は「身体化」を使用する)。

バトラーは、ブルデュ批判以前に、「事実、ともかく欲望するためには、想像上のジェンダー規則に照らして欲望をもちうる身体要件を満たすように変えられた身体自我を信じることが必要となる」(Butler 1990=1999 : 134-5)と述べている。この引用文の「身体自我」も、フロイト

の概念である。もともと、身体に発する刺激から己の身体の輪郭が浮かび上がりそのうちに自我が成立する様に着目し、〈身体的刺激に触発されながら、身体に関する表象のもとに成立する自我〉を指すために使用された(Freud 1923=1996: 223-4)。バトラーにあっては、「身体自我」はもっぱら〈身体に関する表象〉との意味で使われている(Butler 1993: 73)。では、「身体自我を信じる」とはいかなる出来事なのか。「引用の連鎖」が「身体レベルで生きられ信じられている」とはどういうことなのか。「引用の連鎖」という表現から、かかる身体像(表象)が輪郭を付与されていくという様は、我々の前に、浮かびあがる。だがなお、かかる連鎖のもとで形を付与される身体像(表象)が、「身体レベルで生きられ信じられている」とは何事なのか。この問いをたてる時、〈ハビトゥスは身体像(表象)に還元できないと強調するブルデュ〉(Bourdieu 1980=1988: 117)が重要性を帯びる。なぜならば、ブルデュがハビトゥス概念をもって焦点を当てるのは、表象自体ではなく、身体それ自体と符号しているはずの表象を産出する仕組みとしての感覚、しかも、身体訓練を通じて醸成され、かつ、身体所作の繰り返しのなかでしか出現しない感覚であるからだ。

ブルデュによれば、ハビトゥスは、「隠れた法(ノモス)」として作用する構造でもある(Bourdieu 1994=2007: 168)。すなわち、「社会的規範(ノモス)の恣意性を自然(ピュシス)の必然へと変容させ」(Bourdieu 1998=2001: 13)、もって、社会秩序を不動のものとして追認し続けるように仕向ける〈身体化された感覚〉である。かりにバトラーが言うように、「引用の連鎖」としてのパフォーマティヴィティを介して現れる表象としての身体が、客観的実体としての身体をコンスタティブに表現するものであると位置づけられるとしても、ブルデュの論にあるように、表象としての身体を本物の身体と同一であると認知する知覚作用がなくてはならない。しかも、ブルデュは、知覚作用は、自然なもの如く身体に根付いているほど、かかる同一性の認知は、その社会的被構築性が隠匿されやすいとも論じてきた。バトラーが、文化表象としての身体像の自然化を論じるとするならば、ブルデュはかかる文化表象を知覚する作用の自然化を論じるものなのである。

だが、メランコリー概念に照らすと、ブルデュのハビトゥス概念に対して向けられるべき課題もある。身体化した感覚(ハビトゥス)も、身体を表現する記号の反覆(パフォーマティヴィティ)も、ともに規範から自由な所で生じる出来事ではない。ブルデュが「無意識」に言及するとき、身体化の結果、自然化された知覚作用が意識の対象として浮上しない、という意味で使用されるにとどまり(Bourdieu 1994: 127=2007: 154)、法の結果として産出される合法化された領域/非合法化された領域の間の相関関係について十分な論究は行われていない。メランコリー概念はこの未踏の領域にひとつの解を与えるものだ。それによるならば、〈法を再現するべく身体化された感覚〉が自然化される過程は、非合法化されるべき感覚の領域を自己のそれにはそぐわないと否認しつづけることに基づいているのだ。非合法化された感覚領域は、合法化された感覚領域にとっては、逆転した自画像でもあるわけで、完全に忘却することはできない。両感覚が相互に差異化しあいつつも、触発し交じり合う領域として、無意識は措定さ

れうる。

(3) 無意識——パフォーマティブな他者性によるハビトゥスの脱構築

本稿で論じた拡大されたパフォーマティヴィティ概念にもとづけば、言葉、ジェスチャー、物、これらは特定の引用の仕方によって、合法的なそれとして流通する。この条件を満たせばこそ、どのような身体が世界に正統な物質としてありうるのかを画定する作用を発揮する。ハビトゥス概念の側から整理しなおすと、引用自体が儀礼化された身体的行動である。物の使用も身体と物と物理的連関を特定の仕方で組織することで成立するのであるから身体的行動である。身体的行動を繰り返す中で、種々の引用の連鎖が自己同一的なものとして差し出す身体像を、引用に先立ちそれ自体の権利で存在している実体を表現するものであると看取する感覚が、身体の状態として定着していく。こうしたわけで、「行為遂行性の暗黙の形態」としての「身体のハビトゥス」(Butler 1997b=2004: 240) が成立する。

そのうえで、〈メランコリーと抵抗の場〉としての〈無意識〉という視点から、ハビトゥス概念を眺めるとき、これにいかなる変更が必要かが論じられる。メランコリーにあっては、〈表現される身体像〉と〈物質としての自己の身体〉の間に一致を見出す知覚作用は、棄却すべき他者の身体の物質性を否認し続けることで首尾一貫性を維持している。しかし、パフォーマティヴィティが模範的な模倣の形式に従わない引用と化するとき、そして、その事態の中で、法が命ずるのとは異なる身体自我の可能性が描かれうるとき、ハビトゥスとして定着した感覚は、自らが根拠づけえない記号表現、意味内容、指示対象と向かいあうことになる。すなわち、法としてのハビトゥスは、感覚することを己に禁じている物質性の現前可能性により、法としての自信を喪失させられる危機に晒される。メランコリーの機制を前提とするとき、ハビトゥスは、原理的に、自己を否定的に枠づける他者との出会いにより、自然さを剥奪されうると言うべきである。

4. 世界の物質化と他なる場所

(1) 身体 - 物の世界の物質化

繰り返すが、バトラーの「物質化」は、パフォーマティヴィティの効果として、自己同一的な物質としての身体が成立していく過程を示すものであった。奇しくもブルデュも「物質化」について語る。しかし、指し示す範囲が異なっている。ブルデュがいうには、ある関係構造の中に生きる「主体」を生み出すべく文化的に作られた「男性と」「女性との対立」は、「男の空間と女の空間」「との空間的分割の中に」「物質化される *se trouve matérialisée*」。さらに、「物の世界」は「一種の書物」であり、身体をもって作り上げられると同時に身体がその中を「運動や移動」することでもって「読み取られる」(Bourdieu 1980: 129-30=1990: 123)。ブルデュのいう物質化は、文化的に規定された身体のあり様と適合的になるように物が社会的に構築されていく過程を指し、同時に、物の世界を所与として読み取っていく知覚システムとしての身体が

生成することを指す。

2つの「物質化」は、相互に反駁しあうというよりも、社会構造を維持するべく、「物質的同一性」が、文化的に措定されていく様態を明らかにするための理論である。そこで、それを総合することの方が物質化の社会理論にとって有益であろう。すると、物質化は次の如く再定式できる。

①物質化とは、パフォーマンスィヴィティーハビトゥスの協働により、身体と物を、規範に先立ち、それ自体の権利において存在する〈自己同一的な物質〉として措定していく過程である。

②その過程においては、身体と物は、規範に先立ち、互いに有機的な関係をすでに結んでいるものとみなされ、少なくとも、規範に対して従順な主体に対しては、何が何に結び付くか予め決定されているかのごとく（すなわち、〈自己同一的な物質〉として然るべき位置を占めその上で相互に関係を結んでいるかのごとく）現れる。③身体は、規範に沿う形で対象を理解する知覚器官として仕上げられると同時にこの器官と齟齬をきたさぬ表現手段としても生成していく。

〈パフォーマンスィヴィティと社会的位置の関係〉については、すでに論じておいた（2章3節）。では、あらためて、かかる両項の関係は、「物質化」とどう関連するのか。

「物質化」概念に従えば、身体の「物質的同一性」の誕生は、規範の結果である。規範の結果としての物質性は、規範の原因であるかのごとき地位を占めるほどに、所与のデータとして社会に外在するものとしての位置を占める傾向を強める。同時にかかる物質性を所与として信頼を寄せる主体が誕生しているのでなければならない。身体の姿について記号表現を駆使し、その記号内容と指示対象の間の符号を、自然化された身体的感覚により知覚する主体の誕生である。かかる主体形成は、社会的位置の持続にとっても必要である。なぜならば、集合生活において、主体として存在することの資格要件には、どのような肉体を備えたものとして存在しているかという項目が必須的に含まれているからだ。社会的位置が再生産されるには、件の地位を占めるに相応しい主体が形成される必要があるのだが、その主体は、身体を備えており、かつ、身体とはいかなる実体であるのか、どのような物が身体を取り囲むべきなのかを、社会的位置に担保される形で、正統な記号を使用し、知覚できる主体である必要がある。

同時に、そのような主体が再生産されることで、身体と物の物質性が構築されていくのである。社会的位置によって保証される適切な記号の使用は、その使用者の身体が何者であるかを指し示す役割を担う。引用が正統な引用としての資格を得るためには、引用者本人及び引用者が言及する対象の位置に、しかるべき身体が物質として現前しているはずなのである。さらに、身体の物質化は、その身体を指し示すべく配置される物の物質化とも連携しているのでなければならない。例えば、“X”を妻としてめとる“私”の身体は男性としてのそれであるはずであり、“X”の身体は女性のそれであるはずだし、結婚生活を送る“私”と“X”を迎え入れる住宅群は、異性愛カップル向けの物であるはずなのだ。

(2) 他なる場所を基点とする世界の変容

バトラーがいう物質化は、〈自己同一的な物質として現れることが禁じられる領域〉を生成する過程でもある。バトラーいわく、「権力が、対象領域、理解可能性の領域を、所与の存在論として構成する」とき、同時に「根源的に物質化に抵抗するか、もしくは、根源的に脱物質化されているままの *radically dematerialized*、根源的に理解不可能な領域」(Butler 1993: 35) が形成される。かかる領域の現れ方は2つに分類できる。

1 つは、任意の社会秩序にて、〈物質的自己同一性が確認されている存在者に対する他者〉、つまり、〈有徴項のもとで出現する両義的な物質のあり方〉に関わる。むろん、有徴項に置かれる物質も、己の固有の権利においては、自己同一的なものと確認される物質の対照領域としての資格においては、物質として存在しうる。だが、〈有徴項が有徴項としての痕跡を残しつつも、規定の位置から逸脱する際に、現れうる物質のあり方〉は、やはり、物質の秩序、相関する主体性やそれを前提とする社会の秩序と齟齬をきたすゆえ当該の秩序にあっては、根源的に脱物質化されている、というべきである。

2 つ目の現れ方は、パフォーマンスィヴィティの根源的偶発性という一般的性質に関わる。原理的に、いかなる記号秩序も、その偶発性ゆえに、対象としての物質それ自体を徹底的に指示することは不可能であり、物質についての完膚なき理解など不可能だ。ゆえに、パフォーマンスィヴィティの只中で、主体として成立する存在者に対して、現前しえない物質が、必ず産出される。任意の記号秩序に相関して、〈指示も理解も不可能な領域〉が必ず産出される。これが、脱物質化されている領域に属する物質の2つ目のあり方だ。

どちらの場合も、脱物質化されている領域は、任意の権力関係を再生産するべく配置されている規範に沿って合法的に物質化が進行する過程に、相関して生成する。非合法化された、脱物質化されている領域は、身体の集合としての社会が、首尾一貫した論理で構成されるために、必要とされつつも排除される領域、すなわち「構成的外部」(Butler 1993: 35) である。にもかかわらず、「構成的外部」は、当の権力関係と整合的な知によっては知りえない「他なる場所」(Butler 1993: 49) である。その点で、それはいわば「権力の無意識」(Butler 1997a: 104) の相関物とも言うべきだ。

とはいえ、「他なる場所」は、次の点で、世界の変容へと結びつく契機を宿している。それは、①既存の権力関係が許容しえない物質のあり様を囚らずも示してしまう点、②名誉が不当にも剥奪されてきた物質のあり様にこそ自己の基盤をおく主体性の萌芽の源になりうる点、である。

バトラーの論じ方では、「女性」「同性愛」などの、有徴項に付きまとう特殊な脱物質性を通路として、身体の多様な現れ方のより広大な領域の可能性を、探究している。その理論は、他なる場所を一挙に総覧する試みではないが、研究者自身が関わる特殊な主題からそこに関与する実践的あり方だ。理論自体が、パフォーマンスィブな営みであり、己がそのうちに位置する記号の連鎖を手がかりに、今はまだ出現しえていない領域を探索するほかない。それゆえ、〈記号としてのセックスに照らして理想的な身体のあり方を強要する世界〉に、変容をもたらそうと

する理論の実践的選択のありうる帰結としては妥当だ。問題は、「他なる場所」という視座を、ブルデュを乗り越える形で、〈身体 - 物〉および〈社会的位置〉に関する考察へと昇華していない点である。

ブルデュは「社会的に定義される性的分業観」と、「性的同一性の自覚」及び「男と女に帰属する社会的諸機能の特定の社会的定義と結びついた心的傾向の身体化」は、一体化すると論じている。ここで前提とされている社会関係は、異性愛の男女である(Bourdieu 1980=1988: 125-6)。「オカマ」や「ホモセクシュアル」への言及はある(Bourdieu 1980=1988: 116, 125)が、これらの身体、くわえて、その身体の自己同一性を保証するべく身体を取り巻く物の秩序については掘り下げて論じられておらず、異性愛セクシュアリティが「男の空間と女の空間」「との空間的分割の中に」「物質化される」と言われるに過ぎない。だからこそ、バトラーの次の分析は重要だ。

人は中傷的発言によって「ある位置に置かれる」が、ある位置とは、〈位置がないこと〉なのかもしれない。(Butler 1997b=2004: 7 [〈 〉は邦訳の通り])

「社会的に定義される性的分業観」に適合する「位置」には回収不可能な「位置」へと召喚されることは、〈身体的に位置がない〉ことを意味する。つまり、①身体としての物質性のありうべき領域から排除されるそれに自己の身体が置かれている。②引用するべき、自己の身体を記述する適格な表現を持ち合わせていない。③〈位置がないという位置〉自体が、そもそも社会規範によって承認される位置ではないのだから、その位置に相応しいハビトゥスを涵養する身体訓練が社会的に積極的に施されることはない。その位置へと呼ばれるものは、社会において自ら身体を肯定的に評価する感覚を剥奪されている。④身体を取り巻く外界との物質的関係の構築を試みるにせよ、自己の身体の同一性を指し示す物を剥奪されている。こうして、特定の身体は物とともに、脱物質化された状態におかれる。

異性愛主義社会では、同性愛は不名誉なセクシュアリティであり、存在するべきではない身体であると位置づけられる。それは、「他なる場所」に残る物質性である。それゆえ、己を同性愛者であると認めることはリスクを伴う。ブルデュ風に言えば、このリスクは〈物〉と〈物を読み取る身体〉の中に顕現する。例えば、①教育用の施設は、同性愛の身体が相応しくない空間として位置づけられる。②街頭や公園は、好奇の眼差しや暴力の危険を感じざるを得ない所として、同性愛者を追い払う空間である¹⁰⁾。③住居供給市場は、同性間パートナーシップを排除する。これらのいずれの例においても、〈異性愛専用で作られた物〉は、同性愛の身体を迎え入れる物質としては、異性愛の法のもとで産出されたハビトゥスに対して、出現しない。

ゆえに、「オカマ」や「ホモセクシュアル」という名で呼ばれることは、〈社会的・物質的に世界に存在するに値しない自己〉という感覚と結びつく。非異性愛の身体に関しては、本人にとっても、〈公にすることを憚られる感覚〉のもとで、それを理解することも、それを表す行動

を起こすことも、禁じられる。だが、メランコリーの論理によれば、〈同性愛を求める感覚〉は、異性愛主義化するハビトゥスにとりつく。前者が後者に疑義をつきつけ、〈異性愛を自然と見なす感覚〉の歴史的偶発性を言い立てることで、「物質的同一性」の秩序に、いかに変容が生じるのか。バトラーは、正統なパフォーマンスティヴィティを反駁する「他の様々な反覆」（Derrida 1990=2002）が、永続する未来に希望を託す。

「他なる場所に対する他なる場所とは何であろうか」（Butler 1993 : 49）。こう問うバトラーは、「他なる場所」を正統な対象としてコンスタティブに記述し始めるや否や、その営みが「他なる場所」を新しくパフォーマンスティブに産出してしまいう事態へ、注意を喚起する。例えば、「同性愛」という名で指示されてきた身体が、正統な物質の世界へと仲間入りを果たしたとしても、〈異常な、あるいは、不名誉な身体の領域を画定し、その領域に属する身体のもとで生きる者から、主体性を剥奪する、あるいは、限定的にしかを与えない、といった政治〉の形式それ自体への批判が行われない限り、結局、更新され続ける「他なる場所」への配慮は約束されないままである。バトラーが、婚姻制度への包摂を通じての「同性愛」への承認に懐疑的である理由も、特定の種類の結合の特権化への批判が根底にある。セックスの二元論を前提にした異性愛家族の形成に対して対抗的に出現する社会運動は、その運動の帰結として周辺化される身体から「性的自由 sexual freedom」を剥奪するべきではないのだ（Butler et al. 2000=2002 : 217）。通奏低音としてバトラーの議論に流れるこの種の批判は、身体の多元的な生成を目指す理論としては当然である。

だが、バトラーは2つの論点を十分に考察していない。第1に、生成しつつある身体が新たに取り結ぶであろう、物と社会的位置との相対的に安定的な関係である。非異性愛の身体が、恥や暴力への恐怖を感じることなく、存在できる世界が生み出されるには、衣類や日用品、住居、施設、公園や街頭などの諸物はどのように作り直される必要があるのか。並行して、いかに社会的位置は、界¹¹とともに、再創造されるべきか。例えば、社会運動が位置づく界（知人や友人、当事者グループ、当事者メディア、NPOや社会的企業などの組織、などの重なりからなるネットワーク）から、「同性婚」を旗印にしない社会運動は、どのような社会的位置の供給を受けるのか、逆に、界にどのような社会的位置をもたらすのか。新奇の引用の連鎖が別様の身体を現前せしめるという事態は、パフォーマンスティヴィティのみが可能にするわけではない。違反事例である身体が、物質としての自己同一性——むろん、相対的自律性という意味での同一性——を備えたそれとして誕生し、成長していくためには、身体化された新たな感覚、それと調和する物、これらと符号する社会的位置の創出が必要である。

第2に、〈位置不在という位置〉に残された身体に対して保障すべき「性的自由」の内実は何であり、さらに、それを保障する方法は何であるのか。「他なる場所」にまで保障される「性的自由」という構想は、更新され続ける「他なる場所」が原理的に持つべき権利を示唆している。バトラーの主張に沿えば、有徴項の身体が、規定の位置から逸れ、新しい物質性と社会的位置を要求し始めるとき、その営みは、少なくとも、誰／何によっても、侵害されてはならな

い。では、侵害からの保護に責任を負うという実践は、世界にどのように現れうるのか。〈他なる場所の性的自由への配慮〉という態度は、公共の倫理としてハビトゥス化されるにとどまるのか。その種のハビトゥスと呼応する形で、権力関係が高度に制度化された形態である公権力には、かりに付与されるとするならば、どのような義務と権限が与えられるべきなのか。いずれにせよ、これらの変化に伴い、界や物の配置はどのような変化を被りうるのか。「他なる場所」にまで保障される「性的自由」という視座は、位置なき位置から己と世界との関係の再構築を図る営みを支える理念的基盤になりうるのだろうが、それがより具体的な社会構想にいかにか結実するか未解明のままである。身体の多元的な現れ方を擁護する社会理論は、この課題にも向き合わねばなるまい。

5. 結語

身体や主体の自己同一性を産出する基盤には、〈言葉、身体所作、物、これら異質な記号の協働〉(パフォーマティヴィティ)と〈パフォーマティブに差し出される表象を、事実それ自体を反映するものと知覚させていく原理〉(ハビトゥス)がある。パフォーマティヴィティとハビトゥスを基盤に、身体、物、社会的位置の間の諸関係が再生産されていく。その限りにおいて現前するのが、さしあたりの世界である。

他方、その世界は、そこから取り残される〈脱物質化される領域〉との関係においては、変容を迫られうる。異端的なパフォーマティヴィティは、ハビトゥスが命じる身体、物、社会関係に関する秩序に異議を突き付ける可能性がある(バトラー)。しかし、「他なる場所」に新しい生命が芽生えるにせよ、それを迎え入れるハビトゥス、さらに、ハビトゥスが根差す物や社会的位置が、新たに生成するのでなければ、それは脆くも潰えてしまう可能性を軽視してはいけない。その上で、「他なる場所」に対する徹底的な配慮を前提にする社会構想を練り上げる必要がある。

【注】

- 1) 本稿は、ブルデューの記述(Bourdieu 1980:129-30=1988:123)にならい、身体と区別されている物質の意味で、「物 chose/objet」を使用する。
- 2) パフォーマティヴは、意図する内容の遂行たる発話(適切性が問題)を、コンスタティヴは事実の陳述たる発話(真偽が問題)を、指す(Austin [1962] 1975=1978:4,11,25)。
- 3) 例えば、公共空間で同性同士がとる物理的距離も、記号表現になりうる。
- 4) ブルデューのパフォーマティヴィティ論の対象はもっぱら言葉(Bourdieu 1982=1993)。
- 5) 例えば、正統な伝話を担保する文法家や教師の位置(Bourdieu 1982=1993:62)。
- 6) 例えば、①“私はXを妻にする”という言葉、“男にふさわしい”身振りや衣装、式場、これら種々の記号表現の協働とその反覆(パフォーマティヴィティ)。②①の結果として、再度そのもつともらしさが強化される、妻をめとる成人男性という社会的位置。

- 7) 実践の多元性を論ずるべく、ハビトゥス概念を批判的に再生する試みは、村井（2010）。
- 8) 両語は互換的關係。例えば『実践感覚』（Bourdieu 1980=1988 : 91）。
- 9) 邦訳は「身体化」「体内化」の両方がある。
- 10) 公共空間からの同性愛の排除に関する実証的研究（対象地域は日本）は、風間（2003）。
- 11) ブルデュはさしあたり全体社会として社会空間を設定。社会空間の差異化=分化により現れる部分社会が界である。界はその特性に応じ独自の資本（文化資本、社会関係資本、経済資本など）とその配分構造をもつ。社会的位置は資本の種類や量によって差異化される。ハビトゥスは、文化資本の一種であるが、位置 - 界を再生産する根本的機構として、他の文化資本、その他の各種資本に比して、特に重要である（Bourdieu 1994=2007 : ch1）。

【文献】

- Austin, J. L. [1962] 1975. *How to Do Things with Words*. Harvard University Press. (=1978. 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店.)
- Bourdieu, P. 1980. *Le sens pratique: Sur la théorie de l'action*. Minuit. (=1988/1990. 今村仁司・港道隆・福井憲彦・塚原史訳『実践感覚 (1/2)』みすず書房.)
- . 1982. *Ce que parler veut dire: L'économie des échanges linguistiques*. Fayard. (=1993. 稲賀繁美訳『話すということ——言語的交換のエコノミー』藤原書店.)
- . 1994. *Raisons pratiques: Sur la théorie de l' action*. Seuil. (=2007. 加藤晴久・石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳『実践理性——行動の理論について』藤原書店.)
- . 1998. *La domination masculine*. Seuil. (=2001. Nice, R. trans. *Masculine Domination*. Stanford University Press.)
- Butler, J. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge. (=1999. 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- . 1993. *Bodies That Matter: on the Discursive Limits of "Sex"*. Routledge.
- . 1997a. *Psychic Life of Power: Theories in Subjection*. Stanford University Press.
- . 1997b. *Excitable Speech: A Politics of the Performative*. Routledge. (=2004. 竹村和子訳『触発する言葉——言語・権力・行為体』岩波書店.)
- . 1999. "Performativity's Social Magic," Richard Shusterman ed., *Bourdieu: A Critical Reader*. Blackwell Publishers, 113-28.
- , E., Laclau and S., Žižek. 2000. *Contingency Hegemony Universality: Contemporary Dialogues on the Left*, Verso. (=2002. 竹村和子・村山敏勝訳『偶発性・ヘゲモニー・普遍性：新しい対抗政治への対話』青土社.)
- Derrida, J. 1990. *Limited Inc*, Paris: Galilée. (=2002. 高橋哲也・増田一夫・宮崎祐助訳『有限責任会社』法政大学出版局.)
- Freud, S. [1917] 1946. "Trauer und Melancholie," *Gesammelte Werke X: Werke aus den Jahren 1913-1917*. S.

- Fischer Verlag, 427-46. (=1970. 井村恒郎訳「悲哀とメランコリー」『フロイト著作集6——自我論・不安本能論』人文書院: 137-49.)
- . 1923. *Das Ich Und das Es*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag. (=1996. 中山元訳「自我とエス」『S.フロイト自我論集』ちくま学芸文庫: 201-72.)
- 風間孝. 2003. 「カミングアウトのポリティクス」『社会学評論』53(3): 348-64.
- 村井重樹. 2010. 「習慣の社会理論——ハビトゥス概念の批判的継承」慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻2010年度博士論文.
- 長野慎一. 2011. 「唯物論者としてのバトラー——女性というセックスの物質性をめぐって」『年報筑波社会学』第Ⅱ期3・4合併号: 30-51.

(ながの しんいち 東京理科大学非常勤講師)